

災害現場における人命救助の手順を確認するため、解体工事業者と県警による合同訓練が23日、八街市内で行われ、機動隊員や工事関係者ら計約100人が参加した。

訓練は、建物倒壊や土砂崩れによる生き埋めを想定。がれきからの救出では、機動隊員が隙間をのぞき込み、目を凝らしながら声をかけ生存者を確認。手や機械を使ってがれきをどけ救助した。また、土砂崩れ現場では、土留めにベニヤ板を使いシャベルで掘り進めるなど慎重に捜索した。

八街で
合同訓練
100人が手順など確認

県警と解体業者 人命救助で連携



機材を使ってがれきの撤去も行われた
23日、八街市八街への大同産業(県警提供)

県警警備課の小出寛理事官は「東日本大震災の津波では、がれきに漁網などが絡み手作業ではどうにもならず重機の使用が必要だった。相互の得意分野を生かし災害に備えていきたい」。訓練会場を提供した「大同産業」の市原昭八社長は「生存者のことを考えたがれきの撤去作業など勉強になった。今後もできる限り協力していきたい」と話した。

県警と県解体工事業協同組合は昨年12月、大規模災害時に連携して人命救助にあたるため協定を結んでいる。